



病棟内でのタペストリー展示による空間演出に対する病院利用者の印象評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮坂, 真紀子, 山野, 雅之, MIYASAKA, Makiko, YAMANO, Masayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://joshi.repo.nii.ac.jp/records/12.1

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



病棟内でのタペストリー展示による 空間演出に対する病院利用者の印象評価

▶宮坂真紀子
▶山野雅之

1. はじめに

昨今、医療環境におけるストレスや不安の軽減を目的として、病院内でのアート作品の展示やデザイン性の高いインテリアを取り入れるといった試みが行われている。特に小児科の外来や病棟では小児患者が感じている恐怖心や保護者の不安といった精神的な負担を少しでも和らげるために壁面装飾などを取り入れたことで、無機質で冷たいといった病院特有の印象が改善されて安心感を与えることが多数報告されている^{1,2,3,4,5}。しかしながら、青年期から成人患者の病棟では、積極的にアートやデザインが導入される事例はいまだに少ないのが現状である。

一般的な病院でも、外来の廊下や待合の壁に絵画が飾られていることはあるが、その多くは病院へ寄贈されたものでほとんどの職員や患者・家族が作品の選択に関わる経験をしたことがないという現状も確認されている⁴。したがって、病院職員は医療現場におけるアートやデザインを活用した空間演出が病院利用者にとってどのような影響があるのかを考えたり、環境改善における有用性に気付くといった経験をえられる機会は乏しい。そのような背景からも、まずはその必要性を理解してもらうことが重要と考えられる。そのため、アートの設置により院内環境の印象がどのように変化したのかを調査し、その結果を病院職員と共有することが環境改善への第一歩となると考え、整形外科病棟においてアート設置前後の印象評価を行った。以上のことから、本研究報告では、独立行政法人国立病院機構村山医療センター内の整形外科病棟において実施したタペストリー展示による空間演出に対して行った印象評価の結果について報告する。

2. 空間演出の概要

タペストリー展示の経緯

2018年、国立病院機構村山医療センター整形外科病棟へのアート設置の依頼を受けた。病院職員との打ち合わせ後、院内を見学して設置場所を検討した。その結果、整形外科

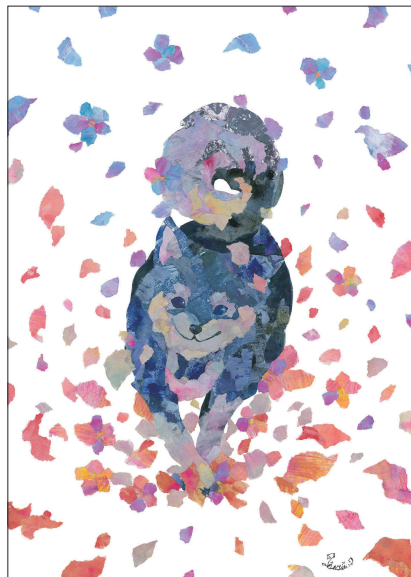
病棟ナースステーション横の廊下壁面への設置が決定した。依頼当時、村山医療センターは新棟建設中につき設置予定の病棟も新棟完成後に取り壊しになるため、取り外し、移設の出来る作品を希望していた。また、整形外科病棟という性質上、落下や接触による危険性が低く安全なもので車いすの患者さんでも見やすい高さで展示してほしいという条件や、10代後半から成人の男性患者が多いため患者の年齢層にあった作品を希望していたことから、今回設置する作品は女子美術大学ヒーリング表現領域の授業内で制作している医療施設への展示を目的としたコラージュによる動物タペストリーが最適と判断した(図1)。

3. 実施内容

タペストリー(以降、本研究ではアートと記す)設置による空間演出に際し、病院側にも調査研究への協力に同意を得たうえで、アートの設置前後に調査を実施した。設置場所は整形外科病棟ナースステーション横の通路の壁面でエレベーターが近く、ナースステーションの横という位置のため、多くの患者・家族・職員が通り、作品を目にする機会が多い場所であった(図2)。壁面の幅とアート作品の大きさを考慮し、3点の作品を展示することとした。作品の選出に関しては病院職員からの依頼に則り日本の動物をモチーフとした作品(ニホンカワウソ、柴犬、ニホンイヌワシ)を選出した。作品は医療環境に展示することを目的として、ヒーリング表現領域の授業において、生き物をテーマにコラージュの技法を用いて表現したものである。したがって、これらの作品は患者や職員が見ても圧迫感や不快感を抱かないような作品とするために、それぞれの作品の制作者は異なっているが白い背景で統一され、鮮やかな色合いで表現されている。また、色合いの美しさだけでなく、子供から大人まで、生き物に詳しい人が目にしてその魅力が伝わるような作品となるように心がけて制作しているのも特徴である。



ニホンカワウソ



柴犬



ニホンイヌワシ

図1 コラージュ作品のタペストリー

4. 調査

4.1. 目的

壁面へのアート設置前後での医療空間に対する印象の変化について調べるために、質問紙によるアンケート調査を行った。

4.2. 方法

4.2.1. 調査期間

調査はアート設置前の2018年11月と設置後の2019年1月に行った。いずれの調査でもアンケートの配布から回収まで2週間の期間を設けた。

4.2.2. 質問紙

質問紙の一枚目には調査の目的や守秘義務について記し、アンケートの回答をもって調査協力への同意とした。調査用紙は著者らから看護師長へ職員・患者への配布を依頼した。後日、看護師長から職員・患者へ調査用紙が配布され、回収された回答はナースステーションでまとめられ、調査期間終了後に著者らが回収した。

アンケート調査では、アートを設置する整形外科病棟の廊下の写真を基にアート有り/Aアート無しの2水準を印刷したものをを用いた。設置場所の廊下は回廊の一部であったため、写真は左右両方向から利用者の視点となる高さで撮影した(図2)。

調査内容は、調査対象者に関する設問(役職、年齢、性別)と院内環境に対する設問であった。院内環境に対する設問では、アート設置に対する意識調査と院内環境の印象評価を行った。アート設置前の院内環境に対する意識調査で

は、病院内でのアート展示に関する設問として(1)病院にアートがあった方が良いと思いますか?(回答は、はい/いいえ/どちらでもないの中から選択およびその理由の記述)、(2)病院にアートを飾るとしたらどのような種類のアートが良いと思いますか?(回答は絵画/立体作品/半立体(レリーフ)/布・織物・染物/その他から複数選択可)、(3)病棟に絵を飾るとしたら、どのような題材や表現内容の絵が良いと思いますか?(回答は抽象絵画/具象絵画/物語のある絵画/遊びのある絵画(パズル・隠し絵・だまし絵など)/その他から複数選択可)、(4)現在の病棟環境について、どの様に感じますか?(回答は不満/やや不満/どちらでもない/やや満足/満足の中から選択および理由の記述)、(5)「誰に対して(または何に対して)アートやデザインが必要だと思いますか?(回答は患者/家族・付き添い/職員/不要の中から選択および理由の記述)の5問を設けた。

また、アート設置前後の院内環境の印象評価はアート設置場所となる整形外科病棟内の廊下を撮影した写真とともに、医療とアートに関する先行研究^{5,6,7)}を参考に設問を設定し7件法で評価を行った。空間演出に対する印象評価では(1)ストレスを感じる、(2)気持ちがなごむ(落ち着く)、(3)気分転換できる、(4)明るい気分になる、(5)緊張感がやわらぐ、(6)殺風景に感じる、(7)安心できる場所だ、(8)患者さんへの配慮を感じる、(9)病院らしい雰囲気だ、(10)精神的に(気持ちが)疲れたと感じるの10問に対して1(全く当てはまらない)から7(非常によく当てはまる)の7段階で評価を行った。

アート設置後の調査では、設置前と同様に調査対象者に関する設問の後に、病院内でのアート展示に関する設問として(1)病院にアートがあった方が良いと思いますか?(回

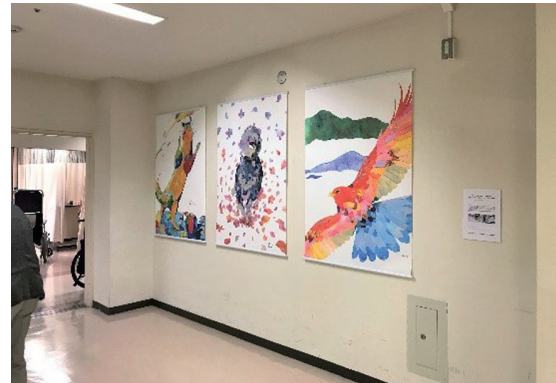


図2 アンケート調査に使用した写真

上段がアート無しの状態、下段がアートを展示した状態の廊下を撮影した写真。

答は、はい/いいえ/どちらでもないの中から選択およびその理由の記述)、(2) アート設置後の病棟環境について、どの様に感じますか? (回答は不満/やや不満/どちらでもない/やや満足/満足の中から選択および理由の記述) の2つの設問への回答を求めた。その他の印象評価の設問はアート設置前と同様であった。

4.3. 結果

4.3.1. 回答者の構成

4.3.1.1. アート設置前アンケート

回収した回答の内、欠損等の不備があるものを除く21名分を分析対象とした。回答者の属性は、看護師13名、学生3名、患者2名、未記入3名であった。また、性別は男性5名、女性13名、未記入1名であった。回答者の年齢層は10代1名、20代4名、30代3名、40代9名、50代2名、未記入2名であった。

4.3.1.2. アート設置後アンケート

回収した回答の内、欠損等の不備があるものを除く17名分を分析対象とした。回答者の属性は、看護師9名、患者8名であった。また、性別は男性5名、女性12名であった。回

答者の年齢層は、20代3名、30代2名、40代7名、50代2名、70代2名、80代1名であった。

4.3.2. アート設置前後での院内環境に関する意識調査

アンケート調査の設問に対する回答は、選択肢と共に自由記述の欄を設けたため、自由記述に記された回答のうち、頻出していた内容は要約し、記述されていた内容そのものを記載する場合は〈(年代・役職)〉で記した。

4.3.2.1. アート設置前アンケート

(1) 病院内でアートを展示について

「病院にアートがあった方が良いと思いますか?」という設問に対し、「はい」14名(67%)、「どちらでもない」5名(24%)、「いいえ」2名(9%)であった。「はい」の理由は、〈病院独特の冷たい印象を感じるのであたたかい空間にしてほしい(40代・看護師)〉〈殺風景な印象をやわらかくできる(40代・学生)〉〈明るい雰囲気になる(20代・看護師)〉というような病棟内の雰囲気を理由に挙げる回答が多かった。また、〈気分転換になる(20代・看護師)〉〈芸術は心を豊かにするから(30代・学生)〉というような精神的な変化を挙げる回答もみられた。「どちらでもない」の理由は、

〈アートの種類にもよると思う、年齢層にも幅があるので(50代・看護師)〉というようにどのような作品が来るのかわからない段階では好みの違いに対して不安に思う気持ちが表れた回答もあった。「いいえ」の理由は、頸椎の疾患で横を向けない(壁に設置された作品では見えにくい)患者もいるため作品設置の場所を理由にした回答であったが、壁よりも天井に設置した方がよいという具体的な提案を含む建設的な回答であった。

(2) 展示する作品について

「病院にアートを飾るとしたらどのような種類のアートが良いと思いますか？」という設問に対しては複数回答可としたため、「絵画」18名、「立体作品」5名、「半立体(レリーフ)」3名、「布・織物・染物」7名、「その他」1名であった。

(3) 絵画作品の内容について

「病棟に絵を飾るとしたら、どのような題材や表現内容の絵が良いと思いますか？」という設問に対しては複数回答可としたため、「抽象絵画」9名、「具象絵画」4名、「物語のある絵画」9名、「遊びのある絵画(パズル・隠し絵・だまし絵など)」14名であった。

(4) アートやデザインの必要性について

「誰に対して(または何に対して)アートやデザインが必要だと思いますか?(患者/家族・付き添い/職員/不要の中から選択および理由の記述)」という設問に対しては複数回答可としたため、「患者」17名、「家族・付き添い」4名、「職員」5名、「不要」1名、「未記入」2名であった。「患者」と回答した理由は、〈一日の多くを過ごす場所だから(年代未記入・学生)〉〈不安な気持ちを少しでも解消できる環境が必要だと思う(40代・看護師)〉〈入院生活のストレスやリハビリの疲れを緩和する必要があると思うため(20代・看護師)〉というように〈安らいでほしいから(30代・学生)〉〈気持ちが明るくなってほしい(40代・看護師)〉という気持ちや〈部屋から出たくなる、会話の糸口になる(40代・看護師)〉〈何度も行き来するであろう廊下などが殺風景だといかにも施設に収容されているという気持ちになるのではないか(40代・学生)〉というように閉鎖的な環境という印象を改善できる可能性を指摘する内容であった。また、「家族・付き添い」では、〈脊損などクリアな人で、疾患、自分の現状を受け入れられていない人が多い(家族含め)。部屋

も暗くしてカーテンを閉めて過ごしたいと思っている人が多い。できれば電気も消したいという。精神が落ちついていないと、アートの種類にもよるが、興奮したりするのではないかと、また、辛く思う人もいるのではないかと思った。ハロウィンの飾り付けすら嫌がられた(20代・看護師)という経験から患者の心理的な状態も含めて配慮が必要であると心配する回答も見られた。「職員」では、〈緊張やストレスを受けやすい環境であるから(40代・看護師)〉、「不要」は〈別にいらないと思う(20代・看護師)〉という回答であった。

(5) 現在の病棟環境について

「現在の病棟環境について、どの様に感じますか?(不満/やや不満/どちらでもない/やや満足/満足の中から選択および理由の記述)」という設問に対して、「満足」1名(5%)、「やや満足」1名(5%)、「どちらでもない」11名(52%)、「やや不満」7名(33%)、「不満」1名(5%)であった。それぞれの回答の理由は、「満足」で〈業務がスムーズに行えているから。ステーション、患者の部屋で過ごすことが多いので、廊下は広さがあればよい(すれ違えない時もあるので)(20代・看護師)〉、「やや満足」は〈落ち着いた雰囲気だから(20代・看護師)〉、「どちらでもない」は〈これが普通の状態だから(40代・看護師)〉〈病院という環境なので当たり前と感じてしまっていた(40代・看護師)〉〈ある意味すっきりとはしている(40代・看護師)〉というように、病院の標準的な設備が整っていれば問題ないという感覚が伺える回答であった。一方、「やや不満」は〈施設が古い(年代未記入・学生)〉、〈暗い、面白くない(40代・看護師)〉〈味気ない、古い感じ(40代・看護師)〉〈もっと清潔であってほしい(40代・看護師)〉、「不満」は〈明るくない(40代・看護師)〉であり、空間の印象や設備の老朽化に対する不満に基づく理由であった。

4.3.2.2. アート設置後アンケート

(1) 病院内でアートを展示について

「病院にアートがあった方が良いと思いますか？」という設問に対し、「はい」14名(82%)、「どちらでもない」3名(18%)であった。「はい」の理由は、〈気持ちが前向きになる、明るくなる(40代・看護師)〉〈気持ちがなごむ(80代・患者)〉という気持ちの変化や〈無機質になりがちだった病棟が明るくなった。壁紙だと変えられないので季節に合った物を時々変えていけると良いと思う(40代・看護師)〉

表1 アート設置前後での印象評価の平均評定値と標準偏差

	アート設置前		アート設置後	
	M	SD	M	SD
1. ストレスを感じる	3.10	1.14	3.31	1.12
2. 気持ちがなごむ (落ち着く)	2.10	0.99	4.31	0.92
3. 気分転換できる	1.45	1.02	4.13	0.86
4. 明るい気分になる	1.70	0.95	4.31	0.85
5. 緊張感がやわらぐ	1.80	0.93	3.88	0.99
6. 殺風景を感じる (飾り気がない)	3.70	1.68	0.88	1.05
7. 安心できる場所だ	2.55	0.86	3.94	0.90
8. 患者さんへの配慮を感じる	2.65	1.24	4.25	1.25
9. 病院らしい雰囲気だ	4.10	1.09	2.81	1.29
10. 精神的に (気持ちが) 疲れたと感じる	3.45	1.24	2.00	1.27

〈面会に来る人が見られるから (20代・患者)〉〈壁一面真っ白よりはよいと思う (40代・患者)〉〈殺風景じゃなくなる (40代・患者)〉〈楽しいと思います (70代・患者)〉という空間に対する印象の変化について述べたものであった。「どちらでもない」の理由は、〈色々なアートを設置するのは良いがいろんな人が制作したものが良い (40代・看護師)〉〈絵の内容がいまひとつ (50代・看護師)〉〈つまらない (20代・患者)〉というもので好みの違いに起因するような内容であった。

(2) アート設置後の病棟環境について

「アート設置後の病棟環境について、どの様に感じますか?」という設問に対し、「満足」7名 (41%)、「やや満足」4名 (24%)、「どちらでもない」6名 (35%) であった。それぞれの回答の理由は、「満足」が、〈明るくなる (30代・看護師)〉〈犬や動物が好き、色がきれい (40代・看護師)〉〈同じ風景、病室、リハ室ばかりだけだとマンネリ化してしまうがアートがあることにより気持ちも明るく前向きになる (40代・看護師)〉〈色彩豊かで楽しい明るい、動物 (生命) とデザイン的に動きがあるのが更に良かった、静物画だったら違う印象になったと思う (40代・看護師)〉、「やや満足」は〈絵がきれい (40代・患者)〉というような概ね好意的な回答であった。また、「どちらでもない」は、〈関心がない (20代・患者)〉〈気付かなかった (20代・患者)〉〈空間だけよりも気持ちがなごみます (70代・患者)〉という感想や、〈一か所だけなので判断し難い (50代・看護師)〉〈もっと見やすい場所に設置した方が良い (40代・患者)〉というような前向きな提案を含む回答であった。

4.3.2.3. アートによる空間演出に対する印象評価

アートによる空間演出に対する印象評価として、(1) ストレスを感じる、(2) 気持ちがなごむ (落ち着く)、(3) 気分転

換できる、(4) 明るい気分になる、(5) 緊張感がやわらぐ、(6) 殺風景を感じる、(7) 安心できる場所だ、(8) 患者さんへの配慮を感じる、(9) 病院らしい雰囲気だ、(10) 精神的に (気持ちが) 疲れたと感じるなどの設問に対して1 (全く当てはまらない) から7 (非常によく当てはまる) の7段階で評価を行った結果から平均評定値をもとめたものを表1に示した。ストレスに関する設問1以外は、アート設置後に評価が改善していた (表1)。アート設置後には設問3から設問5までのポジティブな方向への気持ちの変化に関する項目は評価が向上するとともに、設問6や設問10の院内環境に対するマイナスの印象に関する項目では評定値が下がり印象が改善していることが確認された。また、各設問への評価の構成を図3に示した。ストレスに関する設問1の結果は平均評定値ではほとんど変化が見られなかったものの、設置前には「どちらでもない」が53%、次にやや当てはまるから非常によく当てはまると回答した「当てはまる」が33%、あまり当てはまらないから全く当てはまらないと回答した「当てはまらない」が14%であったのに対し、設置後は「どちらでもない」と「当てはまらない」がともに41%、「当てはまる」が18%となり、ストレスを感じるという評価の割合は減少していた。設問2から設問5のポジティブな感情への変化に関する設問に対しては、アート設置前には71%から81%が「当てはまらない」と回答し、「当てはまる」の回答は0%であったが、設置後は評価が逆転するように約65%から82%が「当てはまる」と回答し、「当てはまらない」という回答は設問2から設問4で0%、設問5で6%と設置前より減少しており、設置後にポジティブな感情を生じる割合が増加していた。また、自由記述で頻出した「殺風景」という印象に関して設けた設問6に対しては、アート設置前は「当てはまる」が67%、「当てはまらない」が28%、「どちらでもない」が5%であったのに対し、設置後は「当てはまる」が0%、「どちらでもない」が6%、「当てはまらない」が94%

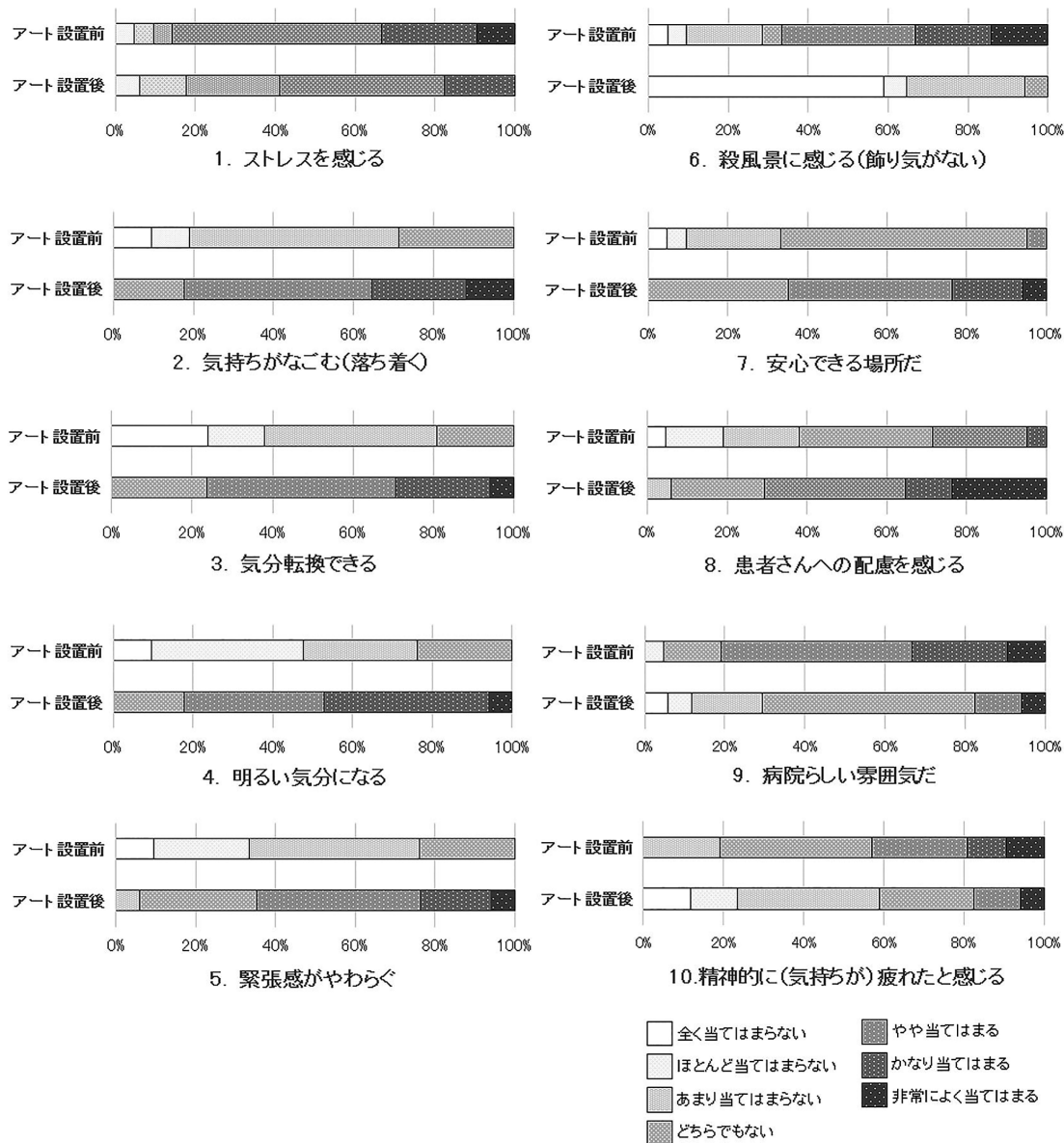


図3 アート設置前後での各設問に対する評価の構成

で殺風景な印象が軽減していた。院内環境に求められる要素である安心感に関する設問7では設置前は「当てはまらない」が33%、「どちらでもない」が62%、「当てはまる」が5%であったが、設置後は「当てはまらない」が0%、「どちらでもない」が35%、「当てはまる」が65%と増加していた。また、患者への配慮に関する設問8では設置前は「当てはまらない」が38%、「どちらでもない」が33%、「当てはまる」が29%であったが、設置後は「当てはまらない」が6%に減少し、「どちらでもない」が24%、「当てはまる」が70%と増加していた。一方、病院特有の無機質さや閉塞感といった印象に関する設問9に対して設置前は81%が「当てはまる」と回答し、「どちらでもない」が14%、「当てはまらない」が5%であったが、設置後は「どちらでもない」が53%、「当てはまらない」が29%、「当てはまる」が18%と回答しており、「病院らしい雰囲気」は減少していた。精神的な疲労に関する設

問10では、「当てはまる」が43%、「どちらでもない」が38%、「当てはまらない」が19%であったが、設置後は「当てはまらない」が59%、「どちらでもない」が24%、「当てはまる」が17%という回答であった。

5. 考察

本研究では、タペストリー展示による空間演出を行った整形外科病棟において、作品の設置前後で意識調査と印象評価を行った。

5.1. 回答者の構成の変化

アート設置前の調査では全回答者が病院職員であったが、設置後は約半数が患者の回答であった。設置前アンケートを依頼した際には、整形外科病棟であるため手を動か

すことも大変な患者も多く、患者へのアンケート依頼は難しいとの話であった。しかしながら、実際にタペストリーを設置した際、病院職員の方々はタペストリー作品の美しさに関心を持ち、喜んで作品を迎えてくれた。暗い印象だった病棟廊下に華やかな彩りが添えられたことで、職員にとっても患者さんの意見・感想を知りたいという気持ちが芽生えたことが回答者の構成の変化に表れたと考えられる。

5.2. 病院内でのアートの展示について

病院内でのアートの展示に関する「病院にアートがあった方が良いと思いますか？」という設問に設置前は「はい」が回答者の67%であったのに対し、設置後は82%に増加していた。また、「どちらでもない」という回答も設置そのものに対する否定的な回答ではなく、作品の好みの違いを心配するものであった。今回の調査結果からは、成人患者の多い病棟でも気持ちが前向きになる、明るくなるといった感想は多く、アート設置が前向きな感情を生じさせるきっかけになることが確認された。また、作品に対する好みの違いやアートそのものが苦手という人も当然ながらいるため、そのような利用者のためにも、アートを設置する側の姿勢として、病院利用者の気持ちに配慮し、不快な気分にならないような作品の選出を心掛けることは大切である。

5.3. 展示する作品や絵画作品の内容について

病院に設置するアート作品の種類に関する設問では、「絵画」が最も多く、次いで「布・織物・染物」であった。今回調査を行った整形外科病棟では絵画が好まれており、描かれる内容としては「遊びのある絵画（パズル・隠し絵・だまし絵など）」「物語のある絵画」「抽象絵画」が好まれることが確認された。Ulrichらは病院内に設置する絵画に自然風景の具象画を推奨しているが⁷⁾、今回の調査では遊びのある絵画やストーリー性のあるもの、抽象画も好まれることが明らかとなった。アンケートの回答からは、〈あまりきつい色ではなく、落ち着いたもので。トリックアート etc は会話のきっかけや面会者との歓談となりよいのでは？（40代・看護師）〉というように、病院という環境になじみながらも自然と会話が生まれる作品も求められていることが伺えた。

5.4. アートやデザインは誰のために必要か

最近ではアート作品の展示やデザイン性のある椅子やインテリアを取り入れる医療施設が増えている現状をTVな

どで目にする機会も多いが、実際に自分の利用する病院にもそのようなものが必要と思う場合、誰に対して（または何に対して）アートやデザインが必要だと思うか調べた結果では、「患者」17名、「家族・付き添い」4名、「職員」5名、「不要」1名、「未記入」2名と患者が圧倒的に多く、患者の不安軽減や安心感をもたらす効果があると広く認知されていることが分かった。しかしながら、家族・付き添いや職員と回答した人が少ないという結果からは、患者を支える人たちの緊張やストレスといったケアする側の精神的な負担も軽減する環境が必要であるとはあまり認識されていないと推測される。病院は健康な生活を取り戻すための施設であるため、本来であればどのような立場の利用者にとっても心地よい環境が提供されるのが望ましいのは言うまでもないが、現実的には患者をケアする側の人にとっても心地よい空間が必要であるとまではあまり意識されにくいと考えられる。

5.5. 病棟環境について

今回の調査ではアート設置前の環境に対して回答者の約4割が不満を感じており、およそ半数が「どちらでもない」と回答していたが、設置後は6割以上が満足しており、病棟環境に対する満足度が向上していた。この結果からは、設置前は病院なので暗いのが普通、見慣れているといったものであったが、アートを設置したことによりマンネリ化した環境でも空間の雰囲気明るくなり楽しいという印象を与えたと推測される。設置後に「どちらでもない」と回答した理由についても、今回の導入規模の小ささゆえに判断しにくいと思われていたことや、もっと見やすい場所に設置した方がよいという提案が示されるなど、好意的な回答が多かったのが印象的であった。受付やナースステーションといった多くの人が利用するエリアでは季節感の演出は会話のきっかけをつくるという点でも大切である。病棟というマンネリ化しやすい環境に変化を与えるという意味でも、季節ごとに付け替えられるようなタペストリー型の作品は軽量で設置が簡単という点も含めて利便性が高いといえる。

5.6. アートによる空間演出について

アート設置前の段階では職員からアートを設置することで患者のストレスになるかもしれないと心配する声もあったが、アート設置前後に大きな変化は見られなかったことから、今回設置したような作品が患者に対してストレス

を与えてしまう可能性は低いと考えられる。病院に展示する作品は、患者・家族の気持ちへの配慮が必要であるとともに、職員にとっても明るく爽やかな気持ちになるような作品が望ましい。今回のアート設置後は(2) 気持ちがなごむ、(3) 気分転換できる、(4) 明るい気分になる、(5) 緊張感がやわらぐといった項目で評価が向上しており、ポジティブな気持ちになるのを助ける効果があったと推測される。また、(7) 安心できる場所だ、(8) 患者さんへの配慮を感じるという項目に対する評価の向上は、病院のイメージ向上において有用性が示されたともいえる。印象改善という点に関しては、(6) 殺風景に感じるや(10) 精神的に(気持ちが) 疲れたと感じるといった項目も改善しており、病院特有の無機質な雰囲気を軽減することができたと考えられる。今回の調査結果からは、アート設置による空間演出には病院利用者の疲労感を軽減しポジティブな気分への変化を促す効果がある可能性も示唆されており、職場環境をより快適なものへと改善する点においても有用と考えられる。

6. 結論

本研究では、タペストリー型アート作品の設置により院内環境の印象がどのように変化したのかを調査するのを目的に、整形外科病棟においてアート設置前後の意識調査と印象評価を行った。その結果、アート設置前の調査では現状の環境に対して暗い冷たいといった印象があるものの、病院として普通の状態と認知されており、アートがあった方がよいと考えるのは7割程度であった。アート設置後の院内環境に対する調査では、明るく開放感を感じる空間へと印象が変化していることが確認され、8割以上がアートを設置した方がよいと回答していた。これは実際にアートが設置された環境を目にしたことにより病棟環境に対して満足感が向上した結果と推測される。印象評価では、アートの設置により気分転換になる、明るい気分になるといったポジティブな感情が生じるだけでなく、安心感を得られることで穏やかな気持ちになり少しでも安らいでほしいという患者・家族への配慮を感じることも確認された。アートによる空間演出に対しては整形外科病棟の特性も踏まえた設置方法の提案や季節により付け変えられる作品があるとうよいと思うといった作品の希望に関する建設的な意見の記述が多く、今後の展開を楽しみにしているといった声も伺えた。今回の調査結果からは、病院利用者にとって心地よ

い医療環境を提供するという点においてアートを活用した空間演出が環境改善の一つの方法として有用であると考えられる。

おわりに

アートによる空間演出を取り入れる医療施設の増加に伴い、小児科や産婦人科といった子どもや成人女性の利用者の割合が多いエリアでの研究や事例報告は増えてきているものの、成人男性の患者が多い病棟ではどういったアートが受け入れられるのかを調べた国内の研究報告はほとんどない。医療環境をより良くするためにアートを導入したいと望んでいる病院がある一方で(すなわち、医療現場にはアートも必要と考える職員がいるということ)、病院は治療の場でありアートが必要であるという意識を持っていないケースも少なくない。アートやデザインを活用した医療環境の質の向上が、患者・家族はもちろんのこと、彼らを治療し支えていく多くの職員にとっても重要であるということを知ってもらうためには、一つひとつの事例をエビデンスとして、その報告を積み重ね、体系的な研究へと発展させていく必要がある。

謝辞

本調査を実施するにあたりご協力いただきました国立病院機構村山医療センターの方々には心より感謝申し上げます。

また、今回のタペストリー展示に際してご尽力いただいた東京都立小平特別支援学校武蔵分教室主幹田添敦孝教諭に改めて感謝を申し上げます。また、本プロジェクトで使用したタペストリー作品を制作した吉邨花梨さん(柴犬)、渡部紗実亜さん(ニホンカワウソ)、板岡優里さん(ニホンイヌワシ)に心より御礼を申し上げます。

註

- 1) Leibrock, C. A. (2000). DESIGN DERAILS FOR HEALTH-Making the most of interior designs healing potential. John Wiley & Sons, Inc.
- 2) 山野雅之・斎藤啓子・鈴木理恵子・山口(中上)悦子(2016). 医療現場の Art and Health : 国内の実態解明を目的とした実践的研究. 科学研究費補助金基盤研究 (C) 報告書, 女子美術大学アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域
- 3) 山野雅之・木下道子・白幡香織(編). (2016). 女子美術大学 北里大学病院ヒーリング・アートプロジェクト制作の記録. 学校法人女子美術大学
- 4) 宮坂真紀子・山口(中上)悦子・鈴木理恵子・山野雅之(2017). 日本の医療現場における Art and Design に関する基礎調査—現状把握を目的としたインタビュー調査を通して—. アートミーツケア学会, 8, 17–33
- 5) 宮坂真紀子(2019). 医療環境における Art and Design 壁面装飾を用いた空間演出に関する質的・量的研究, 平成30年度女子美術大学博士学位論文
- 6) 宮坂真紀子・山野雅之(2018). アートを導入した院内環境に対する注意回復理論の適用 — 壁面装飾を事例とした pilot study. 環境心理学研究, 6(1), 1–11
- 7) Ulrich, R. S., & Gilpin, L. (2003). Healing arts: Nutrition for the soul. Putting patients first: Designing and practicing patient-centered care, 117–146.

Evaluation of hospital users' impressions of the tapestry display installation in a hospital ward

MIYASAKA Makiko / YAMANO Masayuki

This study aimed to investigate the transformation of users' impressions of the hospital environment before and after the installation of a tapestry-type artwork in the orthopedic ward. A survey was conducted using a questionnaire that included a respondent's information such as position, age, and gender and ascertained the respondent's impression of the installation of artworks in the hospital setting, assessment of the hospital environment, and views on the topic of the survey. Questionnaire responses were obtained before the art installation from 21 respondents. After the artwork was placed, another survey was administered to 17 respondents. They were aged from late teens to 80s. The results elucidated that before the artwork was installed, respondents felt that the environment was dark and cold, and approximately 70% thought an art installation would ameliorate the environment. After the artwork was installed, the previous impression of the hospital environment changed to a perception of a bright and open space. After viewing the environment where the art was installed, more than 80% of the respondents articulated that it would be better to install art on the hospital premises and expressed improved satisfaction with the ward environment. The impression evaluation confirmed that the installation of art causes positive emotions such as a change of mood and the perception of a bright atmosphere; it also provides patients with a sense of reassurance due to the visual art. Such changes in impression suggest that it is useful to introduce art in medical settings as it enhances the environment and leads to a comfortable healing space for hospital users.